

# The efficacy of the postnatal nasogastric tube position as a prognostic marker of left-sided isolated congenital diaphragmatic hernia

河野, 淳

<https://hdl.handle.net/2324/6787511>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



(別紙様式2)

氏名	河野 淳
論文名	The efficacy of the postnatal nasogastric tube position as a prognostic marker of left-sided isolated congenital diaphragmatic hernia
論文調査委員	主査 九州大学 教授 大賀 正一 副査 九州大学 教授 加藤 聖子 副査 九州大学 教授 石神 康生

### 論文審査の結果の要旨

主論文の要旨：先天性横隔膜ヘルニア（以下CDH）において出生前の胃の位置は信頼できる予後予測因子であるが、出生後の胃の位置について述べた研究はほとんどない。申請者らは出生直後の胃管の位置について検討した。

日本CDH研究グループのデータベースを用いて、多施設共同の後方視的観察研究を行った。データベースに登録されている15年間1037例中、出生前診断のある左isolated CDH 464例を対象とし、出生直後の胃管の位置が横隔膜より下にある群（BD群；n=190）と横隔膜より上にある群（AD群；n=274）の2群にわけ、比較を行った。主要評価項目は90日生存率とし、副次評価項目は人工呼吸期間、在院日数、再発率とした。

BD群はAD群よりも有意に90日生存率が高く（98.4% vs. 89.4%,  $p<0.001$ ）、人工呼吸期間が短く（11 vs. 19日,  $p<0.001$ ）、在院日数が短く（38 vs. 59日,  $p<0.001$ ）、再発率が低かった（ $p=0.002$ ）。多変量解析ではBD群が90日生存に対する予測因子であることが示された（調整オッズ比, 3.68; 95%信頼区間, 1.02-13.30）。

左isolated CDHにおいて胃管の位置は予後予測因子であり、臨床においても検討すべき項目である。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお本論文は共著者多数だが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。